

日本記者クラブ会報

第 441 号
2006 年
(平成 18 年)
11 月 10 日 発行

〒100-0001
東京都千代田区幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル
◎ 社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

注目集めたシーファー米大使

10月15日(日本時間)、北朝鮮に
対する国連制裁決議(憲章7章41条
にもとづく)が満場一致で決定した。

それを受け急拠、ライス米國務長
官が日本、韓国、中国、ロシアを歴
訪。東京へは18日午前5時40分に着
き、麻生外相、久間防衛庁長官、塩
崎官房長官、安倍総理と会談、翌19
日午前11時5分ソウルへ。

ダメもとでクラブも会見を申し込
んだが空振り。今回は外相会談後の

2人でのぶら下がり会見(飯倉公館
20分)、在京8社代表会見(公邸
30分)、NHKインタビュー(公邸
15分)だけだった。

ライス長官の訪日で、当初19日だ
ったシーファー米国大使の昼食会は
27日に変更になった。変革・強化さ
れる日米同盟と核実験を行った北朝
鮮への対応など、中身の濃い話が聞
けた。スピーチ全文と質疑応答はク
ラブのHPの「会見速記録」に。

クラブ賞の新しい推薦委員

2007年度の日本記者クラブ
賞(募集要領17ページ)の実施を
決めた理事会は、クラブ賞推薦委
員会のメンバーで任期満了の細野
徳治(元毎日)、渡辺みどり(元
NTV)委員の後任に、金指正雄
(元日経論説副主幹)、田畑光永(元
TBS北京支局長)を委嘱した。

推薦委員会は、明年1月末の締
め切り日までに会員から推薦され
た全候補を評価し、選考委員会に
報告する。前記のお二人とともに
重任の相田洋さん(元NHK)、
佐藤信行さん(元共同)、播谷実
さん(元読売)、吉村信亮さん(元
中日)がこの仕事に当たる。

大使の話は別として、振り返って
みて米国の日本国民への説明が少な
くなっているのが気になる。HPで
長官クラス以上のクラブ会見を引き
出してみて驚いた。

70年代、フォード大統領はじめシ
ュレジンジャー国防、ブルメンソー
ル財務、モートン商務、バッツ、バ
ーグラントの農務など10人が会見し
ている。80年代はクエール副大統領

ベトナムの新星・ズン首相

のほか、リーガン財務、ワインバー
ガー国防、シュルツ国防、ポルドリ
ツジ、ベルテイ、モスバーガーの商
務、リン農務など12人。90年代はチ
エイニー、ペリーの国防、モスバガ
ー、ブラウンの商務、ヤイター農務
など7人。
それがブッシュ政権(01・1・
20)になってからは、オニール財務
長官(02・1)1人だけ。単に政権
のメディア対応の特徴なのか。対日
基本姿勢の変化の反映なのか。核の
カサ保障のもとで、安保で日本の負
担拡大を進める、米政府の意図的な
説明回避なのか。吟味に値する。

ことし6月に就任したズン首相が
会見(10・20)でみせた快活さと明
晰さは、ベトナムのニューウエーブ
を予感させるほどだった。56歳の首
相は、12歳で越南部解放軍に連絡員
として参加、96年に政治局員になり、
党中央経済委員長、国家銀行総裁な
どを務めた。経済にも金融に明るく、
決断力も調整力も兼備か。
打てば響くゲストとみると現金な
もので、次々質問の手があがる。そ
れらに真正面から答え、予定の時間
になると、自分でお礼を述べて会見
を締めくくった。

送りのリフトの中で、時間が足り
なくて申しわけなかったというの
で、こちらはこんなことを。来年2
月にクラブのアジア取材団がベトナ
ムを訪問する準備をしているので
「続き」はそこでお願います、と。
すると「そうしましょう。歓迎しま
す」とのことだった。
1階に着いた首相は、少し離れた
ところで国旗をふるうアオサイ姿の
女性がまざったグループを見つけ、
背伸びをするようにして手をあげて
満面の笑顔で応じた後、車中へ。
(専務理事 岩崎玄道)

渡辺 靖 慶応大学教授

▼旧来の差別から新しい壁の現出



政治、経済、軍事に偏重しがちな米国発の報道が、果たして米国の生の姿を十分に伝える

ているか。この疑問に答えるシリーズの第1回にふさわしく、知的刺激に満ちた話だった。

現地調査に基づく渡辺教授のポイントは、米国ではここ十年ほど、文化が政治の中に占める重要性が非常に重くなった、という指摘だ。例えば、死刑制度、差別的積極的矯正、妊娠中絶、同性婚、ES細胞、知的設計論などをめぐる対立が政治問題化している。こうした価値、信仰に基づく問題は、妥協が困難で先鋭化しやすい。

中間選挙にしても、小さな政府、自己責任という点では政策の違いは少ない。イラク問題も、反対派は理

10・6(金)研究会「アメリカの底流」①
司会 中井良則委員 出席 55人

念を伴った代案が出せず、共和、民主は基本的に近い。州レベルでは赤(共和)青(民主)と色分けされるが、カウンティ・レベルでは保守、リベラルが混在し、中間色の紫がしばしばだ。個人はもつと複雑だ。保守化する米国といっても、黒人の国務長官が2代続き、次の大統領選挙で女性有力となるなど、単純に決めつけられない。

新しい社会現象として、渡辺教授は全米に5万あるゲート・コミュニティをあげる。住民の多くは白人富裕層。テロ、麻薬、犯罪、乱脈な性などから守られた勝ち組の自足の砦だ。自治体にとっても開発費、公的サービスの負担がないのは魅力。メガ・チャーチも隆盛だ。若者をひきつけるため十字架も無く、カジユアルな服装の牧師が世俗的な話で対話を図る。ショッピング・モールもあり、同じ社会層が集う教会自体が増え続け、刑務所産業複合体が成長産業だ。増殖を理想とした米国で、旧来の差別の壁が低下する一方、新しい壁が実現しているのは興味深い。

産経新聞出身 宮本 倫好

渡部 潤一 国立天文台天文情報センター長

▼宇宙の輪廻転生

この夏、天文のニュースが新聞やテレビを大いに賑わせた。冥王星が惑星から外され、9個あった惑星が8個に減ってしまったのだ。舞台は国際天文学連合。その惑星定義委員会の委員を務めた渡部さんが「天文学のいま」を軽妙な語り口で解きほぐしてくれた。

137億年前にビッグバンと呼ばれる大爆発によって生まれたとされる宇宙。その中で輝いている星々は、まずは宇宙に浮かぶ塵とガスから誕生し、成長しながら核融合反応を起こして光り輝くようになる。こうした赤ちゃん星を見ることもできる。オリオン大星雲を照らし出している



4つの星は生まれ、約200万年、それでも人間に例えると生後1週間後の赤ちゃん

10・10(火)研究会「天文学のいま」
司会 柴田鉄治委員 出席 70人

ん星なのだという。

成長した若い星は青く燦然と輝くが、核融合のエネルギー源である水素が尽きてくると表面温度が下がって赤くなり、最終的には爆発を起こして死に至る。ところが、この時、星は自ら作った炭素や窒素、酸素など様々な物質を宇宙にばらまき、こうした星のかけらが次の世代の星のもとになっているというのだ。

46億年前にできた私たちの太陽系も実は前の世代の星たちが作った物質を受け継ぎ、地球は幸運にも生命をはぐくめる絶妙の環境に作られた。しかし、地球も50億年後には爆発して死を迎え、まき散らされた物質は次の世代の星に引き継がれることになる。渡部さんは「宇宙は星を媒介にした物質の輪廻転生が繰り返り広げられている」と言う。

2061年8月にはあのハレー彗星が再び地球に接近するという。半世紀も後のことなので、これを見ることはできないであろう。でも地上の喧騒をしばし忘れ、久しぶりに夜空を仰いで渡部さんが勧める「星空浴」を楽しんでみようと思う。

NHK科学文化部長 田口 五朗

中川 秀直 自民党幹事長



▼新政権の高揚感

「安倍政権のプロデューサー」を任じる中川秀直自民党幹事長が、外交を中心に発足早々の政権の実情などを語った。

会見は10月11日。安倍首相が直前に中国、韓国の電撃訪問に踏み切り、北朝鮮が核実験を発表。東アジア情勢が混沌としてきたさなかという絶好のタイミングだった。

中韓両国訪問については「安倍氏をイデオロギーの人と見誤ってはいけない。国益に立脚した戦略の政治家だ」と説明。靖国神社参拝問題を事実上棚上げして、両国訪問を決断した安倍氏の柔軟性を強調した。

北朝鮮の核実験の発表にも触れて「日本、中国、韓国、北朝鮮の中で靖国問題で日本が孤立していると指

10・11（水）記者会見
司会 橋本五郎委員 出席 159人

摘されていたが、今回の中韓との首脳会談の結果、日中韓対北朝鮮という戦略状況が生じつつある」と語った。「時代が安倍首相を創り、安倍首相が歴史を創る」とも語った。いささか大袈裟に過ぎるように思えたが、政権発足早々の高揚感は伝わってきた。

安倍政権の「歴史的意義」に比べると、現実政治をどうこなしていくかという点では物足りなかった。政調会長当時には「成長会長」を自認して増税に頼らない成長政策を説いたが、この日の講演では具体的な政策にはあまり言及されなかった。

相次ぐ重要な選挙にどう臨むのか、郵政法案に反対した無所属議員の復党をどう判断するのか、そして「政治は生活だ」と訴える小沢一郎氏の民主党との対決の行方は……。聞きたいことは山ほどあったが、講演40分、質問20分では短すぎる。

質問も活発だったとは言えない。私も含めて参加者の反省材料だ。「小さい政府」「新しい保守の理念」を掲げる論客だけに、次回は丁々発止の応酬を実現したいものである。

朝日新聞編集委員

星 浩

小池百合子 首相補佐官

▼安倍首相分身の力量

安倍政権の人事で、閣僚の顔触れ以上に目を引いたのが、5人の首相補佐官だ。安倍晋三首相がどこまで「公約」通り官邸主導を貫けるか。何ができるのか、本当に首相のプレインたり得るのか、補佐官への注目の度合いは高い。

小池百合子首相補佐官は5人の中ではただ一人の閣僚経験者で、いわば筆頭補佐官というところだろう。担当も北朝鮮の核実験を受けて政権にとって緊急重要課題の国家安全保障問題担当。それだけに小池補佐官の気負いが記者会見の中からもよく伝わってきた。

安倍首相から①首相を補佐し、首相への助言を与える②日本版NSC（国家安全保障会議）創設の任務を言い渡された。

早速、訪米し、安全保障担当のハドリー大統領補佐官と会談し、NSCづくりへのアドバースをもらったという。



10・13（金）記者会見 司会 中井良則委員
出席 117人

米国とは制度が異なる日本で、大統領府に対応できる官邸機能強化ができるか、閣僚と補佐官が両立するのか、誰もが危ぶんでいるのが実情だろう。それをものともせず小池補佐官は「私はラインではないので、一歩引いて、しかし全体を眺め渡せることが必要だ」「省益を超えた国益の戦略強化の余地づくりが役割」と、突き進む姿勢は明確。

しかし北朝鮮に対する制裁といった各論対応になると、貨物検査については「この時点での判断はしづらい」「こうあるべきと申しあげるのには不適當」と、歯切れが悪くなった。ことの性質上慎重姿勢が求められるとはいえ、訪米中には「安倍首相の分身に」とまで公言した小池補佐官としては物足りない。

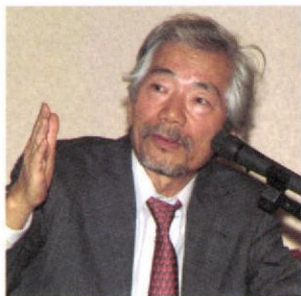
10月9日の北朝鮮の核実験で官邸に駆けつける際も「お化粧に若干時間をかけて」出掛ける小池補佐官の落ち着きぶりは特筆に値する。

共同通信編集委員 神原 元廣

山本 直樹 国立感染症研究所 エイズ研究センター長

10・17(火)研究会「HIV/エイズ」②
司会 宮田一雄委員 出席 41人

▼ウイルスはサッカーボール



朴訥な
口調で難
解なウイ
ルス遺伝
子の解説
などが続
くと、こ
らえ性の

ない記者はついウトウトしてしま
う。しょうがないですねえ、と司会
者が思い始めたころ、著名なウイ
ルス学者は何食わぬ顔でこんな話を挟
み込む。

エイズの原因となるHIV(ヒト
免疫ウイルス)の大きさは直径11
0ナノ・メートル。人間の体を地球
大に拡大して比較すると、HIVは
サッカーボール程度になる。

「エイズというのはサッカーボー
ルが地球をやっつけているような状
態です」

あれ?この人、けっこう面白い人
なのかもしれない。ずいぶん壮大な
比喩だが、ウイルスの小ささはリア
ルに迫ってくる。

カナダのトロントでは8月に第16

回国際エイズ会議が開かれ、医学研
究の分野で注目されたのが治療から
予防へのシフトだったという。

地球上には推定3860万人もの
HIV陽性者がいて、この人たちす
べてに必要な治療を提供するのは現
状でも至難の業だ。これ以上、感染
が拡大すればどうなるか。そこで、
「病気になる前から治療するより防
ぎましょう」と予防の必要性がこれ
までになく重視された。

ただし、そのための最大の武器と
なる予防ワクチンに関しては「この
先、10年は難しいという見方が大勢
を占めた」という。この苦難の10年
を持ちこたえるにはどうしたらいい
か。会議では、男性に頼らず女性が
自ら選択できる感染防止策から、男
性の割礼手術の予防効果までさまざ
まな手段が議論されたという。

山本さんは11月30日から12月2日
まで東京で開かれる第20回日本エイ
ズ学会のプログラム委員長でもあ
る。人間を地球大に拡大することで、
山本マジックは難解な基礎研究を一
気に等身大に近づけて見せた。エイ
ズ学会も楽しみだ。

産経新聞編集長

宮田 一雄

ジャック・ロゲ IOC会長

10・19(木)記者会見 司会 井田由美委員
通訳 池田薫 出席 115人

▼「外科医」の手法と決断

2001年にファン・アントニオ・
サマランチ氏から国際オリンピック
委員会(IOC)会長職を引き継い
で以来、4度目の来日。今回は、2
016年夏季五輪への日本の都市
(東京都)の立候補を視野に入れた、
日本オリンピック委員会(JOC)
などからの働きかけに応じた。

ベルギーの整形外科医だったジャ
ック・ロゲ会長は、IOCを率いる
手腕にも「外科医」がのぞく。詳細
なデータを把握し、執刀時には自ら
決断する。外交官だったサマランチ
氏一流の根回し、人心の読みや、半
歩先を見越した布石といった掌握術
ではなく、透明性、民主性、理論で
攻める。良くも悪くも、IOCを会
社組織に変えたと言われるゆえんだ。



ロゲ会長は、事実を告知しないこ
とはあっても、曲げて伝えることは
しないため、意図をその言葉に汲み
易い。会見では、北朝鮮の核実験実
施宣言で、2008年北京五輪に向
けた初の南北朝鮮合同チーム結成
に、今や「疑問符が付いた」と、先
行きの暗雲を認めた。野球の五輪実
施競技への復帰には、「大リーグト
ップ選手の参加と薬物問題」が、依
然大きな障壁であると指摘した。

肝心の東京五輪招致に関しては、
二つのメッセージを残した。東京の
立候補をIOCが非常に喜んでい
ること。これは本音で、大都市が手
挙げ五輪のプレステージが上がるこ
と、経済大国日本で五輪への関心が
再び高まることは、IOCの有形無
形の財産になる。

ただ、日本の招致の質の高さに確
信を示しながらも、過去8度の開催
経験がある米国などを念頭に、「他
の候補都市も全く同じで、厳しい戦
いになる」とクギを刺した。わざわざ
言及したあたり、日本の招致関係
者はどう読むか。

読売新聞運動部次長

結城 和香子

グエン・タン・ズン ベトナム首相

10・20(金)記者会見 司会 宇治敏彦
画委員長 通訳 グエン・カン・ルオン
在日ベトナム大使館参事官 出席 109人

▼戦時の闘士・平時の経済通

ベトナム最南端のカマウ市で生まれ、12歳で解放戦線に参加した。泥と炎の戦場を連絡員として走り、やがてカンボジア国境のキエンザン省に派遣され軍務所長として指揮。米軍が撤退した時26歳、青春は戦いの中だった。「ベトコンの闘士」を思わず経歴だが、会見に現れたズン首相は剛直とは対極の雰囲気。南部人の気質がざっくりばらんで柔軟。「ベトナムも頭の柔らかな人が首相になった」と新鮮な印象を与えた。



「最大の貿易相手国である日本は発展に欠かせない最大のパートナー」。首相になって最初の訪問国に日本を選んだ。経済発展を最優先の課題にしているからだ。2010年までに一人当たりGDPを1200ドル(現在700ドル)に引き上げるといふ。日本と経済連携協定(FTA)の協議を始め、近くWTOに

加盟する、と声明した。

解放戦争の輝かしい勝利の陰でベトナムは深い傷を負った。数百万人が死亡・負傷し、産業や生活のインフラは根こそぎ破壊された。その後、中国とは紛争が起き、頼みとしたソ連は崩壊した。独自の市場経済ドイモイを手探りで始めて20年、やっと成長の足がかりをつかんだが、タイ

やマレーシアに水を開けられていく。

「奇跡的な復興を遂げた日本の知恵を借りたい」と日本に援助を求めると、ベトナムには底力がある。

アメリカを破った戦闘力の背後には、正確で持続的な組織プレーができる勤勉な風土が息づいている。

8000万の人口は豊かな労働力と大きな市場である。政策と指導者に恵まれれば躍進する可能性を秘めた国・ベトナム。党中央経済委員長、国家銀行総裁を経験した柔らかな頭のズン首相が腕を振るう時がきた。

朝日新聞編集委員 山田 厚史

フィル・ゴフ ニュージーランド国防・貿易相

10・24(火)記者会見 司会 中井良則委員
通訳 池田薫 出席 35人

▼東アジア経済連携協定への期待

キウイの輸出促進から大量破壊兵器の拡散防止構想(PSI)まで、管轄は広い。北朝鮮の核実験から約2週間という時節から、質問は安全保障の分野に集中した。

国連で決議された北朝鮮への船舶検査に、ニュージーランド(NZ)は参加するののかとの問いに対し、「国連の決めた要件のもと、国際法の枠組みの中で行う」と答えた。公海上で強制力を伴った船舶検査ができるかどうかについては、積極的な米国と消極的な中国など各国で温度差があるが、ゴフ氏は慎重な言い回しに

終始した。一方で「NZはPSIに賛同し訓練に参加している。北朝鮮の船に大量破壊兵器が積み込まれているとの情報があった場合は、協力



する」と述べた。

NZは日本よりはるかに厳しい非核政策を貫く。米国、豪州との3国間安全保障条約のアンザス条約も凍結し、米国の核の傘には入っていない。「核兵器の保有に向けた論議も必要だ」と口にする日本の政治家もいる中、「核は持たない」と明言した安倍晋三首相に対し、ゴフ氏は「首相のはっきりした表明を強く支持する」と歓迎した。

30分のスピーチのうち、半分以上を費やしたのは日本とNZの貿易促進についてだった。日本は農産物の市場開放に慎重で、NZとは自由貿易協定(FTA)の交渉も始めている。ゴフ氏は「NZの農産品の脅威は大げさに語られている。日本とNZは季節が逆で、日本の農産物とは競合しない。私たちは質の高い安全な食べ物を送り出すことができる」と熱を込めて語り、日本政府が今年8月に提唱した、アジア各国にNZと豪州、インドを加えた「東アジア経済連携協定」(EPA)への期待感を強く表明した。

毎日新聞外信部 山本 紀子

ハンス・ヨアヒム・デア 駐日ドイツ大使

▼若い世代の交流拡大を

「日独友好の絆を、若い世代に引き継いでいきたい」

23年ぶり三度目の日本勤務。70年代半ば、神戸の総領事館に初めて赴任したところと比べると、日独が互いの国に抱くイメージは大きく変わったという。

「互いのポジティブなイメージは変わっていないが、ドイツと言えばクラシック、日本と言えばマンガ大国、と昨今は狭い領域だけで見られがち。それを改善したい」

今も昔も、日本人はドイツが大好きだ。しかし、日本人が愛してやまないのは、日本人が一方的に描いているイメージに偏りがちなものも確か。なか「新しいドイツ」の実際の像が伝わらない。優しい語



10・24(火) 記者会見 司会 矢島誠司委員
通訳 田口絵美 石川桂子 出席 45人

り口の中に、そんなもどかしさにもじむ。

「ベルリンにいる欧米の若者はアート、ファッション、音楽、ライフスタイルと、ベルリンの魅力に取り憑かれている。ロンドンやニューヨークに比べてまだ完成されていないエキサイティングな魅力を感じてもらうようだ」

「日本の若者にも面白い、創造的な、楽しい国、とのイメージを発進していきたい。ロンドンで一週間過ごす費用で、ベルリンなら一カ月楽しめますし」

一時間にわたる講演と質疑は、大使の幅広い外交経歴を反映し、安保理改革からトルコの欧州連合(EU)加盟交渉、戦後補償問題まで多岐にわたったが、この日の一貫したテーマは若い世代の交流拡大。

この夏まで全国的に展開された「日本におけるドイツ年」や、先のサッカーW杯での盛り上がりを受けて、新しいドイツ像がどう展開されるか、大いに楽しみだ。

東京新聞外報部長 安藤 徹

太田 昭宏 公明党代表



▼二つのキーワード

なにげない言葉が、物事の本質を語ることがある。

その意味で太田昭宏公明党代表の会見で印象的だったのは、「考え方が違う」と「閣下」という二つの言葉であった。

前者は、安倍晋三首相とどう向き合うかという質問に答える文脈で出てきた。

太田氏は「現行憲法は優れている。全然だめとか、押し付けられたというなら、考え方が違う」と語気を強めた。

それまで「自民党総裁、総理大臣と個人の考えは違う。(安倍氏は)総裁、総理として発言している」「信頼関係は高まっている」などと、首相をかばうような発言が続いていた

10・25(水) 昼食会 司会 岸田郁弘理事
橋本五郎委員 出席 102人

だけに、おやつと思わせた。

首相は「占領軍の影響下で憲法が制定されたのは間違いない事実だ。制定過程にこだわらざるを得ない」と語っている。両者の憲法観の溝は深いようにみえる。連立政権の存続を決しかねない問題になっていくのだろうか。

後者は、今年3月に訪中して胡锦涛国家主席との会談を披露したとき、「閣下」と敬称をつけたもの。最高指導者に敬意を示したのは、党間交流における存在感の違いが背景にあるのだろう。だが、日中間では「対等」な交流がやはり基本に違いない。

答えにくそうな質問もあった。竹入義勝氏(初代委員長)などを攻撃している真意を問われ、「竹入氏は党のお金を私的に流用したという事態だ。庶民の党とは随分違いがある。あいまいではなく、批判したほうがいい」と説明した。

そのない受け答えぶりではあったが、丁寧に、思うところを語りかけていた。

産経新聞論説副委員長

中静 敬一郎

羽生 善治 三冠

▼飄々としたなかにも風格

「15連覇」は大変な偉業に違いないが、かつて「七冠」を制覇し、タイトル通算獲得数が歴代2位の65、現在も王位、王将との三冠という羽生王座の場合、単なる通過点に過ぎない気がしてくるから不思議だ。「囲む会」では、飄々とした語り口のなかに、36歳の年齢に似合わない風格すら漂わせていた。



代表質問ということで、羽生王座が少しは考え込むような問いをしたつもりだったが、百戦錬磨の棋士には通用しなかったようだ。「七冠のときの自分と対決したら勝てるか」という質問には「勝てるかどうかは別にして、当時よりは将棋への理解が進んでいると思う」との返答。同じく「最盛期の大山康晴十五世名人が相手なら——」ときくと、「(大山名人は)新しい戦法にはてこずるかもしれないが、力戦型になれば今でも超一流のはず」。大先輩への畏敬の念を持ちつつ、言葉の端々にトッ

ブ棋士としての自信がのぞく。今年、話題をまいた名人戦問題に關しては、朝日、毎日の具体的な共催の形態が決まっていないう状況のため突っ込んだ話は出なかった。しかし、会員からの「平常心の持ち方」「勉強法と休養法」といった質問に対しては「ほーっとしているのは大事な時間」などと、ユーモアも交えて日常生活を紹介。将棋の国際化など普及に話が及ぶと「日本の将棋はチェスなどとは比べても特異なゲーム。世界普及のためには駒の形状や文字を含めて、様々なアイデアが出てきていい」と熱っぽく語っていた。

将棋の棋士がこの会に登場したのは、晩年の大山名人以来、16年ぶり。将棋界の中心人物という意味合いではその大山名人以来の人材であることは間違いなく、また将棋界の将来を最も考えているのが羽生王座であることも確信できた。

日本経済新聞編集委員

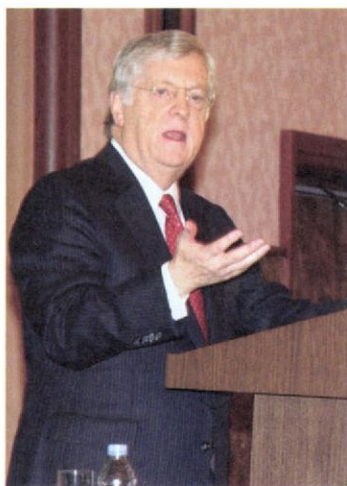
木村 亮

トーマス・シーファア 駐日米国大使

▼核保有論議をけん制

「米国の牛肉が出たように思ったんですが、そうだったんですかねえ。米国の牛肉という前提ですが、とてもおいしかったと思います」
軽いジョークで始まった大使の記者会見は、北朝鮮の危機に關して、米国の日本に対する姿勢が十二分に伝わる内容だった。

「この危機の間に日本も核武装する必要があるのでないか」という意見が始めました。そう切り出した大使は、「冷戦の真っ只中にフランスのドゴール大統領が今の日本と同じ議論を行った。しかし、歴史を振り返ると間違っていた」と指摘。「米国が日本を防衛するという確約を日本の国民はこれからも信頼することができると語り、核保有論議は不要と強くけん制した。」



次においた方がいと、日本側に検討を迫った。

「敵が発射したミサイルが日本に向かってきているかどうか見極めるまで迎撃できないのか、それとも領空で、あるいは領空に向けて発射されたものなら日本への脅威と考えるのか、今答えを出しておいた方がいい」と、

会見では、冒頭発言に約25分、質疑応答に50分余が割かれ、12人が計21問質問した。これほど質問が続出し、丁寧に答えるのは異例だ。ちなみに、昼食会が出たステークスは米国産ではなかった。

時事通信解説委員長

田崎 史郎

国分 良成 慶応大学東アジア研究所所長

10・30(月)研究会「中国」①
司会 田崎史郎委員 出席 107人

▼日中首脳会談と政治の激震

「一種のクーデターにも近い巨大な政変だった」。国分良成教授は9月末に起きた上海市の陳良宇書記の解任劇をこう表現した。

陳書記は、日本や台湾をめぐる政策で胡錦濤政権に干渉を繰り返してきた江沢民前総書記率いる「上海閥」が、密かに次期最高指導者にも想定していた人物。

10月8日に突然、実現した安倍晋三首相の公式訪中、日中首脳会談の背景が「政治の激震」との関連で解き明かされていく。

「日中関係の改善は胡主席の強力なリーダーシップで上から行われた。反発はものすごいが、今のところ抑えつけられている」

圧巻は国分教授自身が中核メンバーの新日中友好二十一世紀委員会の



会合に触れただりだ。安倍訪中の10日後に中国・青島で開かれたが、「会議の最初と終わりで中国側の反応が変わっていった」という。

当初は、安倍訪中時に発表された日中共同プレス発表に「靖国」や「台湾」が明記されていないことに、不平を鳴らしていた中国側が、これを評価し、今後の日中関係の出発点とすべきだとする日本側に次第に同調していく。胡主席の方針が浸透していくのを目撃した。

国分教授は既に紹介の必要がない中国政治・外交研究の第一人者。日中関係も二国間関係だけでなく、米國をはじめ世界の中でとらえる広い視野が特徴だ。研究材料は文献資料に限らず、各国の外交官、研究者との幅広い人脈を通じた先端的な情報も含まれている。講演の中にも各メディアが伝えている「独自ダネ」が各所に盛り込まれていた。

「北朝鮮の核実験に関して六カ国協議の失敗を胡政権の責任にする批判が反対勢力から強まっている」
胡政権の多難さを強調する言葉が頭に焼きついた。

東京新聞論説委員

清水 美和

取材する側 される側

皇室ニュースに思うこと

高橋 紘

一昨年春の「皇太子発言」から悠仁親王誕生まで、皇室をめぐるニュースがメディアを賑わした。宮内省(庁)という名前が大宝律令にもあるように、天皇・皇室問題は歴史的背景があり、複雑で難しい。「皇室問題に関する有識者会議」で女性天皇容認論を主張したせいとか、私にも内外から取材依頼が多かった。

あす朝のテレビ出演の都合はどうか(迎えは6時半)。一度お目にかかってお話をうかがいたい(最低1時間は覚悟)。自宅前にテレビ局のワゴン車がよく停まり、大学にも大型の中継車が来た。食事中に電話が鳴り、収録に来るといっているので晩酌を控えた。週1ゴルフも今夏初めて5週間休んだ。

被害者めいたことを言っているが、共同通信の現役記者のときは逆の立場だったのだ。社会部は範囲が広くコトが起きるとナマや企画取材で専門家に当たった。取材する方は気楽なものだ。社名と名前を名乗れば、拒否されることはまずない。

聞く方は1回だが、答える方は似たようなことを何回も繰り返す。かつてお相手いただいた先生方は、これに耐えてくださったのである。仕事を中断して、取材を受けてくれたのだ。昔々攻めた身としては「お返し」の気持ちはあるが、それにしても大変な日々であった。

自分の経験から「この人は分かっているいな」と思うことがよくあった。最近ではトラブルを恐れてか、話した内容をファクスで送ってくる。ひどいのもあるので直させてもらう。デスクに戻ったような気分になった。

「先生(と呼ばれるのも慣れてきた)のお話は、今回見送らせていただきました」と、電話やはがきで謝ってくる律儀な記者がいる。その一方で談話が載っているのに、掲載誌を送ってこない週刊誌もある。注意すると送っては来るが、一言のお礼も書いていない。

「取材する側」から「される側」に回ると、現役のころのわが身の不明を恥じるばかりだ。それにしても皇室の問題が、マスコミに何回も、それも大きく登場することは、あまり好ましいことではない。

(共同通信出身 静岡福祉大学教授)

安倍首相・中韓歴訪

「想定内」と「想定外」の二日間

▼倉重 奈苗
(朝日新聞社)

夫人の手を握ってタラップを降りる首相――。

10月8日、北京空港で見せた安倍首相の姿は、戦後生まれの首相としての「世代交代」と「小泉前首相との違い」を象徴するかのようで、国民の目には新鮮に映ったと思う。これは麻生外相が夫人と手をつなぐようアドバイスしたもので、首相も「そんなことしたことがない」と戸惑いながらも応じた。

■同行登録261人

新政権が発足して2週間足らずで実現した日中、日韓首脳会談。交渉に携わった外務省幹部が「外交官生命をかけていた」と言うほど、その実現までの道のりは長く、折衝はぎりぎりまで続けられた。

首相が靖国に行かないことの確約を求めていた中国側と、「靖国に行っただか行かなかったか、行くか行かないかは言及しない」と曖昧な態度を

とり続けた首相との間でどうやって折り合いをつけたのか。首相が自らの政治信条を容易に曲げるとも思えず、取材は会談に至るまでの経緯を追うことから始まった。だが、限られた人たちで交渉は進められたうえ、首相の支持基盤に直結する話だけに会談そのものの取材よりもはるかに難しい作業だった(検証記事は10月7日付朝日新聞朝刊に掲載)。

同行に登録した記者は特派員を含め261人。小泉前首相が8月に行ったカザフスタン、ウズベキスタン歴訪の57人と比べても「単独首相同行では異例の多さ」(外務省報道課)で、政府専用機はすし詰り状態だった。

■新しいキーワード盛り込む

午後1時すぎに北京空港に到着した首相は、会談場所の人民大会堂に直行。天安門広場には中国の五星紅旗と並んで日章旗がはため

き、協調ムード一色だった。首相は歓迎式典を終え、そのまま温家宝首相、胡錦濤国家主席、呉邦国全国人民代表大会大会常務委員長のトップ3と会談。

一連の会談では激しくやりとりをする場面は一度もなく、合意した日中共同プレス発表には「戦略的互恵関係」という新しいキーワードが盛り込まれた。靖国問題で冷え切った日中関係の目指すべき形として日本側が提案したものだった。懸案だった靖国参拝問題も双方が従来の原則的な立場を述べ合っただけ。北朝鮮がすでに発表していた核実験予告声明についても「深い憂慮」と「朝鮮



大統領主催の晩さん会一初的首脳会談は「核実験の激震」に見舞われた(10.9)＝松本敏之(朝日新聞社写真センター)撮影

半島の非核化」で一致し、想定した範囲内で記事のトーンも早々と決まった。

■機中で「核実験」の事前通報

日中が前向きなら、日韓も同じ――。そんな予想をしながらソウルに到着した我々の元に飛び込んだのが「北朝鮮が核実験を実施した」の第1報だった。後でわかったのだが、首相には北京からソウルに向かう機中で実施の事前通報が伝わっていた。

プレスルームに設けられたテレビ画面には繰り返し核実験のニュースが伝えられ、緊迫した雰囲気。ソウル支局の特派員は核実験の取材に回り、盧武鉉大統領との首脳会談は東京から同行した記者で対応した。会談では盧大統領が従軍慰安婦問題で河野官房長官談話への姿勢を問いただすなどの場面もあったが、北朝鮮の核放棄に向けた日韓連携がメインになった。

北朝鮮が首相の訪中訪韓に合わせ核実験を実施したかはわからない。ただ、中韓との関係修復をはかる一方、北朝鮮に対し強硬な姿勢をとる首相にとっては、この実験はいかにもタイミングがよかったように見える。くらしげ・ななえ 1997年入社 大阪社会部などを経て、04年東京本社政治部 05年12月から外務省担当

小野田寛郎さん

84歳、「らっせ」の証



山下 幸秀

サンパウロから1時間、カンボグランド空港の空は、果てしなく広がっていた。2月に入ったばかりというのに、気温は32度。ブラジルは夏から秋に移ろうとしていた。

小野田寛郎さんが、私たち夫婦を出迎えてくれた。背筋をまっすぐに伸ばし、いつも若々しい。自ら運転する日本車のナンバプレートは「1922」。自分が生まれた年だ。空港から50キロ、車は原野を貫く国道を轟進する。私たちが「FAZENDA ONODA」（小野田牧場）を訪れたのは昨年2月だった。地元の日系人会の句会で、のちに小野田さんが詠んだ句である。

友を待つ滑走路の果て 颯雲

小野田寛郎さん。32年前の昭和49

年（1974）3月、フィリピン・ルバンゲ島から30年ぶりに生還した、あの元陸軍少尉である。当時51歳だったが、いま84歳。ルバンゲ取材が縁となっておつきあいが高じて、小野田牧場を訪問することになったのだ。

* * *

牧場は成田空港より広い。周囲48キロ、面積1200ヘクタール。2000頭の食肉牛が放牧されている。ルバンゲ島から帰還した翌年、実兄の薦めもあって、小野田さんは単身海を渡った。その後、結婚した15歳年下の町枝さんといつくりあげたのが、この牧場である。灌木が茂る坪1000円の原野を開拓、国や人から金の援助を受けずに、徐々に拡大していった。

牧場の朝は野鳥の鳴き声で明け。地平線から灼熱の太陽が昇る。

さあ、朝飯前のひと仕事だ。小野田さんは白馬にまたがって走り出す。すかさず私も伴走する。ブラジル人の3人の牧童、支配人の里晋平さん、2匹の犬が後を追う。とっさに私も一句ひねった。

天高し響くわわ並べて武人ともとゆく

「ホイイ、ホイイホイイホイイ」小野田さんの甲高い声が大草原にこだまする。その声を合図に、牛の群れが動き出す。牧草が青々と茂る隣のサークルへの移動だ。落雷から牛を守るため、サークルを囲む針金には、アースが仕掛けられている。ジーパンに半長靴、カウボーイハット。青年将校を思わせる小野田さ

んの手綱さばきを見ながら、軍刀を手にも、初めて私たちの前に現れた、遠い「あの日」を思い出す。

この人に「風化」という文字は無縁なのか。硬い岩石でも、長い年月風雨にさらされれば、崩れたり分解したりして、土になるといふのに。

* * *

小野田寛郎元少尉が、100人を超す私たち報道陣の前に姿を見せたのは、昭和49年3月10日、午後9時25分。その衝撃は、いまでも鮮烈に記憶している。

私は産経新聞の取材班キャップとして、6人の同僚とフィリピンへ飛んだ。その2年前には、28年ぶりに発見された元陸軍軍曹、横井庄一さん（当時56歳・故人）を追って、グアム島で取材している。その経験をひっさげての出撃だった。

和歌山県出身の小野田元少尉の生存は、とっくに確認されているながら、日本政府の救出作戦はことごとく失敗してきた。それだけに、この奇跡の生還を多くの人たちが歓迎した。列島は沸き、ニュースは地球を駆け巡った。

急拠設営された記者会見場は、ルバンゲ島の山腹にあるフィリピン空軍のレーダー基地。雑草が茂るグラ

ウインドに架設の電灯がともった。

待つこと3時間。漆黒の闇の中から、元少尉は古びた戦闘帽と軍服で身を包み、軍刀を左手に持って現れた。鞘は今にもポロボロに朽ちようとしている。しかし、柄（つか）にはしっかりと白布が巻かれていた。

会見は元少尉の「儀式」で始まった。直立不動。熱風を切り裂くように右腕を掲げた。肘を45度にピンと張り、私たち日本の若い記者たちに敬礼した。絵になる。カメラのフラッシュが激しく光る。

そして、記者たちの質問には、一人一人正対して答えていった。さらに驚いたのは服装がきまっていたのだ。

私が書いた当時の記事を引用する。《軍服はつぎはぎの手製である。

しかし、ほころびはすべて繕われている。まるでアイロンでもかけたように、節目さえついている。まにあわせにつけたボタンは、白、黒と色違いだが、だらりと緩むことなく、しっかりとついている》

終戦になっても、帝国陸軍からの正式な投降命令が伝わらず、29年と3カ月、青春をまるまる戦場に捧げながら、いささかも風化しない一人の日本人がここにいる。当時36歳の私は、突然出現した「武人」に目を見張った。

この毅然とした立ち居振る舞いは何なのか。どのようにして培われたのか。疑問は開封されぬままに、歲月は過ぎていった。

* * *

謎が解けたのは、それから28年もたつてからだだった。

嬉しい再会だった。

小野田さんが東京・大手町にある新聞社まで、妻の町枝さんと2人で訪ねてくれたのである。

早速、疑問をぶつけた。

「よく観察していましたね」

小野田さんは、静かに話し出した。

「誇りを失ってはいけません。いま、日本人に必要なのは誇りです」

そして、続けた。

「大切なのは、らしさです。らしさ」というのは、自分の仕事、役割が何であるか、それをしっかりと把握し、やるべきことをキチンとやる。責任をもって遂行することです。それが誇りにつながるのです」

役所や企業、そして、さまざまな人が不祥事を起こすのは、この「らしさ」を失っているからだという。

そうか。あれは「らしさ」だったのか。あの朽ち果てそうな軍刀、端正な身だしなみ、威厳にみちた立ち居振る舞い。あれは帝国陸軍軍人と

しての、日本人としての、いや、小野田寛郎としての「らしさ」を、形で表現したものだのだ。

祖国の繁栄も知らずに30年、孤独な戦いを続けながらも「らしさ」を磨いていたのだろうか。

最近では東京とブラジルとの二重生活になった。正月をはさんで、日本が寒い時期は灼熱の地で暮らす。

ブラジルでは牧場主であるだけではない。地元、南マツトグロツ州の名誉州民であり、日本人移民が集う地域日系人会の会長もつとめる。

東京では「小野田自然塾塾長」。

夏になると、福島県の自然の中でのキャンプ活動を通じて、子どもたちを鍛えている。スタートして17年、体験した子どもは2万人を超す。

* * *

牧場の入り口近くに建つ古びた木造平屋が、事務所を兼ねた母屋である。軒下の広い土間には大きなテーブル。ここが食堂だ。

滞在9日目。明日はお別れだ。いつものように、夕食後のコーヒーを飲みながら語りあう。夜空には大河のような天の川、その向こうで南十字星がきらめく。

「不撓不屈」。小野田さんが一番好きな言葉である。困難にあたっても

ひるまず、くじけない。この文字を背負って、南の島を生き抜いた。「不撓不屈」は、小野田さんを支える「らしさ」の背骨でもある。53歳で挑戦した「FAZENDA ONODA」も、その産物だろう。

それでもなお、「らしさ」を追求する小野田さんの戦いは、終わりのうもない。

でも、何故そこまで戦い続けようとするのだろうか。

「自然の中で暮らしたかっただけです。その気になれば、どこでも食っていきますからね」

そう言うと、小野田さんはいたずらっ子のように笑った。

それは裏を返せば、「オレは戦争屋じゃあない」ということだろう。

確かに小野田さんは、なんでも、とことんやり遂げる。どこでも生きる力を持っている。

この牧場は、男の意地。小野田寛郎の「らしさ」の証ではないか。

私の話をじっと聞いていた小野田さんは、静かにうなずくと、満天の星空に目をやった。

やました・ゆきひで会員 産経新聞社顧問 1937年横浜市生まれ
早稲田大学卒 62年産経新聞社入社
社会部長 常務取締役 96年日本工業新聞社代表取締役社長 03年退任

開業1年 つくばエクスプレス ハイカーも観光客も 流れ込む



▶鈴木 信竹
(茨城新聞社)

東京・秋葉原と茨城県つくば市を最速45分で結ぶつくばエクスプレス(TX)の開業から1年余りが経過した。昨年8月24日の開業以来、順調に乗客が増えている。都心から身近になった日本百名山の一つ、筑波山が中年ハイカーの人気を集めていることも要因だが、渋滞などの問題も顕在化。つくば市内はマンション建設が相次ぎ、業者と市民の摩擦が絶えない。市は「想定外」の効果に対応が後手に回っている。

「天気が良いのでちよつと来てみようかと思って。もう3回目」と都内に住む60代の男性ハイカー。筑波

山は標高877メートルとさほど高くなく、軽装で登れる。つくば駅から筑波山中腹の筑波山神社へは直行バスで40分ほどだ。

TXを運営する首都圏新都市鉄道(東京)によると、初年度は需要予測1日平均13万5000人に対し、約15万人が乗車、今年8月には約18万5000人にまで伸びた。この1年間は「筑波山観光などで定期外の乗車が多く、予想より2割上回っている」(同社広報室)という。

神社周辺には5つの温泉旅館が軒を連ね、宿泊客も2、3割増と潤う。「だれが予想できなかったのか。観光客が一気に流れ込んだ」と経営者も驚きを隠せない。「一過性に終わらせてはならない」と土産物の開発や

順調に乗客を伸ばすつくばエクスプレス。つくば市は想定外の観光客増やマンション建設への対応に追われている



順調に乗客を伸ばすつくばエクスプレス。つくば市は想定外の観光客増やマンション建設への対応に追われている

ふもとの史跡のPRに余念がない。県のまとめでは、2005年度のつくば市の観光客は前年度より約45万人増え、約401万6000人。県内3位から1位に躍り出た。

マイカー客も増え、渋滞が深刻化。アクセスは県道一本に限られ、今年の大連連休は最大2時間半の渋滞が発生し、「せつかく近くなつたのに、長時間バスに押し込められる」とTX利用の観光客に不評を買った。県道は生活道との理由から通行規制は見送られ、市は今年の紅葉シーズンにもとに臨時駐車場増設などの対策を取るが、ふたを開けてみるまでは分からない。

一方、ふもとの大学や研究機関が集積する筑波研究学園都市は、TX開業の2年前ほどからマンション建設が相次ぎ、計画中も含め、約3500戸分が供給されている。

地元の不動産業者は「都内で土地を買うのが難しくなつた業者がつくばで土地を探している。引き合いは多く、いつまで続くのか」と舌を

巻く。学園都市は地権者から土地の提供を受け建設された。「高度利用を図りたい」という地権者の意向で、都市計画法上の用途は、低層住宅と高層マンションの混在が可能な中高層住居地域。

「研究者は所得が都内並み。教育水準も高く、他の地域よりも1割高く売れる」とあるマンション業者。近隣住民は「学園都市の景観を乱す」と協調し、反対運動を展開している。

これを受け、市は来年4月にも建物の高さを規制する都市計画法の「高度地区」を導入する予定だが、「格好の機会」を逃すことになる地権者や建設業者から反発を招き、決定までには曲折をたどることになる。

すずき のぶたけ 2000年入社 学芸部 土浦支社を経て 04年からつくば支社

一口メモ つくば市

人口 203,280人 (10月1日現在)
世帯数 80,488世帯 (同)
面積 284.07平方キロメートル

茨城県南部に位置し、北に筑波山などで成る水郷筑波国定公園、南に牛久沼を擁する。東京の過密緩和などを目的に1963年の閣議了解で、筑波研究学園都市の建設が決定、国の大学や研究43機関が移転し、現在、民間も合わせ200超の研究関連機関が集積。つくば市は4町村合併で、87年11月に誕生し、翌年に旧筑波町、02年に旧茎崎町を編入した。昨年の国勢調査で人口20万人を超え、来年4月には県の権限が委譲される特別市に移行する予定だ。

北朝鮮核実験

ベニズワイガニなど
水産業者の悲鳴

▶平井 誠司
(山陰中央新報社)



舞鶴港（京都府）と並んで北朝鮮船籍の貨物船の入港が多かった鳥取県の境港。

水産物やマツタケなどを積んで入港し、中古自転車や中古家電などを満載して北朝鮮・元山港などに帰る船の姿はごく普通の光景だった。ところが、北朝鮮が核実験実施を発表した10月9日以降は状況が一変した。

北朝鮮の元山市と友好提携していた境港市の中村勝治市長は、急ぎよ記者会見を開き、関係見直しを表明。議会や水産関係者らと協議し、政府による北朝鮮への追加制裁の閣議決

定を踏まえて13日、協定破棄を正式に表明した。地元の大手荷役会社も11日から北朝鮮の船を対象に荷の積み降ろしを自粛していた。

還日本海の西日本の交流拠点を目指している境港。対岸貿易は戦前から盛んだった。国交がない北朝鮮の都市と友好提携していたのは国内唯一。拉致問題が明るみになって以降、ミサイル発射などことあるごとに市役所や関係業界などには抗議電話やメールが国内から殺到した。そして、我々マスコミの取材も集中。北朝鮮籍船がらみの偽米1000ドル札、覚醒剤密輸などの事件が明るみになるたびに、報道陣が殺到した。

「マスコミは境港を殺す気か」「北朝鮮と関係のない水産物まで色眼鏡で見られる。風評被害が一番怖い」。水産関係者から悲痛な叫びが聞かれた。そして、多くの人たちが口をつぐみ、過去に商取引があったことすら触れたがらなくなった。タブーが生まれた。

境港に水揚げされるベニズワイガニ（年間約1万1000トン）のうち、約3割が北朝鮮側に入漁料を払って北朝鮮海域で漁獲されていたことも今回明らかになった。境港を基地とするカニかご漁船3隻。14年前から行われ、かつて5隻が操業して



10月13日まで11隻の北朝鮮籍の貨物船が停泊していたが追加制裁が決まり現在はその姿は1隻もない

いたこともあった。

18日時点で、まだ2隻が北朝鮮海域に残り、漁具を回収していることが判明。だ捕されるかもしれないと、緊張しながらの取材となった。境港支局は私一人だけ。本社はもとより東京など関係する支社支局を挙げての総力戦。近くの米子総局の記者たちも現場に動員され、かん口令が敷かれた3隻の漁船会社をはじめ口の重い水産関係者らを取材した。結局、3隻とも無事に退避。無謀と見えた漁具回収については、国からは補償できないと言われ、漁業者にとっては死活問題でギリギリの選択だったという。

北朝鮮海域での操業は水産庁の許可を得て行われてきており、安全確

保と経済制裁強化を理由として25日に許可は取り消された。3隻の船主は「国策には従う」としたが、制裁解除後の操業許可と漁具回収や漁獲減など損失の補償を求めている。

境港のかご漁船が北朝鮮近海まで出向いて操業していた背景には、日韓暫定水域で漁業秩序が確立されず、日本船が事実上締め出されてきた背景がある。他の日本のかニかご漁船との競合、水揚げの減少を心配する地元カニ加工業者など、今後影響が出るのは必至となっている。

ひらい・せいじ 1979年入社 学芸部 鳥取総局報道部長を経て 2004年3月から境港支局長

一口メモ 境港市

山陰地方のほぼ中央部に位置し、1956年に市制された。面積28.75平方キロ、人口37,077人（8月末）。古くから水産物やマツタケの水揚げが盛んで、日本最大の物流拠点の一つ。国際的な観光地としても知られ、120以上の観光客が訪れる。また、日本最大の水産物加工工場がある。1979年に学芸部が設置され、2004年に境港支局長に就任した。

リレーエッセー

OPECとの 出会い③

1973年10月6日、エジプト軍がシナイ半島に侵攻して、第4次中東戦争が勃発した。私が日本経済新聞の特派員としてペイルストに着任して半年あまりのこと。



開戦から十日、ペルシャ湾岸のOPEC（石油輸出国機構）加盟6カ国が原油の公示価格をバレルあたり3・01ドルから5・11ドルに引き上げ、OAPC（アラブ石油輸出国機構）が米国およびイスラエルを支援する国々への石油供給を「毎月5%

第1次ショック

主権に目覚めた産油国

▼奥田 斐規

削減する」と決定。アラブ諸国の「石油を武器とする戦い」が始まり、いわゆるオイル・ショック（第1次）が引き起こされた。アラブ・イスラエルの戦闘は国連安全保障理事会の停戦決議で10月末までに終息したが、石油資源に対する主権に目覚めた産油国の戦い、すなわち、原油の価格および生産量の決定権をメジャー（国際石油資本）から奪回する戦いの火は収まることなく、OPECの動向に世界経済が揺さぶられることになる。経済紙の特派員としては、目を離

原油価格SDR
OPEC基本ム

原油値上げの方向示唆

原油価格の暴落を招いたOPECの決定は、産油国の主権に目覚めた産油国の戦い、すなわち、原油の価格および生産量の決定権をメジャー（国際石油資本）から奪回する戦いの火は収まることなく、OPECの動向に世界経済が揺さぶられることになる。経済紙の特派員としては、目を離

せない「OPEC」。総会、閣僚会議として加盟国の動きを追って3年間ほどペイルスト、カイロを拠点に東はテヘラン、クウェート、リヤド、西はアルジェ、トリポリと走り回った。現在に比べればまだ緩やかであったが、飲酒は禁じられているイスラムの国。取材で汗をかいた後の冷たいビールを渴望したこともしばしばだった。75年6月には、原油価格のSDR（IMF「国際通貨基金」の特別引き出し権）表示が議題になるとい

ので、OPEC閣僚会議会場の西アフリカ、ガボン（96年6月まで加盟国）の首都リブルビルへ飛んだ。ここまで取材に来た日本の記者はほかにはいなかった。この時の記事「SDR表示、基本合意」（別掲）は、その後進展がなく具体化はしなかった。この半年後の12月21日には、アラブ・ゲリラがOPECの本拠を襲撃、サウジアラビアのヤマニ石油相（当時）らを人質に立てこもるという事件が発生、雪の降りしきる、クリスマスの飾りが美しいウィーンに駆けつけたこともあった。例えば、「OPEC」は記者冥利に尽きる取材対象であった。（おくだ・よしのり TVQ九州放送顧問 元日本経済新聞記者）

■会議報告

第358回企画委員会

（10・3 宴会場）

今後のゲスト候補や研究会などについて協議した。

出席 宇治委員長、宮田（謙）、石井、中井（良）、橋本、中井（康）、脇、田崎、菅沼、影山、川戸、井田、芋原、和田、廣瀬、國府、三好、柴田、藤村の各委員。

第276回会報委員会

（10・13 シルバールーム）

10月号について意見交換した後、11月号の編集や「リレーエッセー」のテーマなどについて協議した。

出席 住田委員長、池谷、石田、仙石、高橋の各委員。

第350回会員資格委員会

（10・20 大会議室）

11月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 高畑、伝川、泉、田中、柿原、工藤の各委員。

第431回理事会（書面）

一、クラブ賞規約と内規にもとづき、2007年度の日本記者クラブ賞を実

施することを了承した。

一、第15期（2007・2008年度）クラブ賞推薦委員を左記の会員に委嘱した。（*印新任・敬称略）

相田洋（NHK出身） *金指正雄（日経出身） 佐藤信行（共同出身） *田畑光永（TBS出身） 播谷実（読売出身） 吉村信亮（中日出身）

会員インタビュー



デスピナ・プル

ギリシャ大使館一等書記官
(広報・文化担当)

8月に着任した。ニューヨークとギリシャの隣国アルバニアでの経験がある。「これだけの規模で、これだけ安全で、これだけクリーンな都市はみたことがない」と。東京の印象を興奮気味に話す。

大使館は六本木ヒルズのすぐそば。同じ町内に古い神社や主婦としてお気に入りの個人商店もある。このコントラストが気に入っているという。東京の生活リズムに波長が合うのか、週末、家族で近所へ出かけるのがとてもたのしいと。「散歩中に神社やお寺を見つけると日本人のするようにすぐにおまじりします。宗教の違いなんて気にならない。古代ギリシャは多神教だったわけだし……」。自身の宗教はもちろんギリシャ

正教。「東京に教会はないので、この前の日曜日にお茶の水のニコライ堂に行きました。ロシア正教とはもともと同じなので、言葉の違いも気にならなかった」と。

ギリシャのことを話し始めると、古代文明から、ベルシャ戦争、ビザンチン帝国と話題が駆け巡り、ついていくのが大変。聞く方もすっかりギリシャ・モードに入り、無謀にも古代哲学者の中では誰が好きかなどとたずねてしまった。

プルさんは少し間をおいて、アリストテレスと答えた。「合理的、実践的な思索は、現代生活の指針としても十分に通用するから」。

父親の生まれはホメロスの出身地といわれるエーゲ海のイオス島。エーゲ海には大きい島だけでも50ほどあるが、自分が訪れた中では、サントトリーニ島がベストだという。「海底火山の噴火の影響で、景観が飛びぬけてユニーク。言葉で伝えようとすると、その価値が目減りしてしまうぐらい美しい」。

夫のフリガナス氏は次席(参事官)。一人娘で16カ月のカテリーナちゃんがいる。(石川)

EU加盟広報・報道
担当者懇談

EU加盟国の在京大使館広報・報道担当者の会合に講師として招かれた(10・4)。主に財政的理由なのだろうが、加盟国のクラブ会員は年々減っている。駐日EU代表部を除けば、いまはギリシャとフィンランドとフランスだけになっている。

声をかけてくれたのは、フィンランド大使館のリサ・カルピネン参事官。フィンランドがことし後半のEU議長国なので、この会合の幹事をまかされている。夏以降大幅に入れ替わった各国担当者向けに、クラブの概要や役割について説明してほしい、と依頼された。

16カ国、20人ほどの参加者たちに、大使館と協力して何ができるかを中心に話した。元首、首相、外相などが来日した際の公式会見の場として

クラブは約40年の実績がある。内外への発信力とトップ・ジャーナリストたちへの影響力を有効に使ってほしい、と強調した。

このほか、文化関連行事の記者発表や少人数の懇談の場として適している点などもPR。

意見交換では、独大使館のフィッツェ広報部長が「駐車の手配などロジ面でもクラブ事務局のアレンジは完璧だ」と発言してくれた。ことし2月に「フィンランドの夕べ」をクラブで開催した、カルピネンさんは「想定を超える参加があり、自国のイメージアップに確実につながったと思う」と、クラブとの連携を評価した。

少しは参加者の皆さんに役に立つ話ができただけではないかと思うが、英語で相互の立場を踏まえ、わかりやすく話すのは骨が折れることを再確認した機会でもあった。(石川)

リベラルの交友 社も違い、活躍舞台も欧州と米国と異なる。共にクラブ賞を受賞していただいているが、熊田亨さんとの交情がこれほどだったとは知らなかった。松山幸雄さん(元朝日論説主幹が、8月12日、パリで死去した)藤村

信さんを悼む」を、世界の11月号に書かれている。リベラルを代表する二人の駆け出しは、時期はずれるが偶然長野支局。いまは紅葉一面かも。読後、国際記者の両先輩から学ぶべきは「品位と読書」だということを得心した。(玄)

●不都合な真実：アル・ゴアの信念と情熱

「一瞬だけ米国の次期大統領になったアル・ゴアです」

映画は、こんな自己紹介で笑いを誘いながら始まった。元副大統領の地球温暖化対策を訴える講演活動の記録である。

姿を消したキリマンジャロの雪、氷が見つからずにおぼれ死ぬシロクマ、強さを増すハリケーン……。衝撃的な映像や豊富なデータを次々に繰り出しながら、地球の危機を訴え、「不都合な真実」から目をそむけるブッシュ政権を痛烈に批判する。

取り上げられている個々のデータや現象の解釈については、議論の余地があるかもしれない。しかし、地球環境の大きな変化は現実の問題であり、座視してはいけないというメッセージは説得力がある。

大統領選で敗北した後、「地球の危機を伝えるのが使命」と、米国内だけでなく、アジアやヨーロッパも含めて千



◎配給：UIP映画

回以上の講演をこなしてきたという。89年、マサチューセッツ工科大学で、環境を語るゴア氏の熱弁が聴衆を魅了していたことを思い出す。情熱は変わらない。

きっかけは映画の中でも語られる。母校ハーバード大の講義で環境問題

に目を見開かされたこと、交通事故で息子を失いかけた経験が地球環境の大切さを再認識させたこと。

そのゴア氏を擁した前政権ですら、米国は温暖化問題に前向きになれなかったことは事実だ。しかし、強い

信念と情熱を持った政治家をどれだけ持つか、そこにおそらく国の将来がかかっている。

見終わって、もしゴア氏が「一瞬だけの次期大統領」でなかったら、と考えずにはいられなかった。今、私たちはいぶん違った世界にいたことは間違いない。

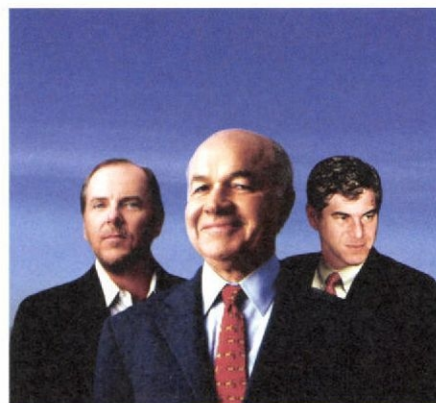
朝日新聞論説委員 辻 篤子

●エンロン 巨大企業はいかにして崩壊したのか? ……罪の感覚、まひに驚愕

米国の経済社会を震撼させたエンロン社の破綻から5年。経営規律の強化を目指す企業改革法が施行され、今年10月には元最高経営責任者のスキリング被告に禁固24年4カ月の判決が下って、この一件も一段落した。そんなとき、事件を振り返って問題の核心をと

らえようとするドキュメンタリー映画が現れた。

エンロンはケン・レイ元会長(今年7月に死去)によって1985年に創設され、15年で全米7位の企業となる。だが2001年10月に「ウォールストリート・ジャーナル」紙がエンロンと子会社の癒着を報じたのをきっかけに粉飾会計などの不正が表面化。2カ月で破綻した。



◎www.enron-movie.com

の証言、株主総会の記録映像などで構成し、不正が広がった過程をつぶさに検証している。

驚くのは、経営者らの「罪の感覚」のまひである。決算に疑問を持つ投資家が「なぜ貸借対照表を発表しないのか」と問うと、スキリング被告

は「指摘に感謝」と述べ、間を置いて「バカ野郎」と小声で口走る。カリフォルニア州大停電では、電気の価格を上げるといふ暴挙に出る。停電で困惑する高齢者からかつて笑う声(録音)

が流れるといった具合だ。

エンロン事件は自由化が先行し規律強化が後れたため起きたともいえるが、映画をみると結局は人間の問題と思えてくる。ルース・ベネディクトが指摘した欧米の「罪の文化」はどこかで大変容したのだろうか。

日本経済新聞論説副主幹 平田 育夫

映画の最後に、横田めぐみさんの父・滋さんが撮った家族スナップが映し出される。新潟市の寄居浜で日本海を眺めるめぐみさんと双子の弟たち、そして母・早紀江さん。どこにでもいそうな幸せな家族は、その一年三カ月後に、眺めていた海を隔てて引き裂かれる。

映画は奇をてらわず、記録資料、関係者の証言を淡々とつなぐことで、逆に事件のむ

ごさを浮かび上がらせる。映画のメッセージは「家族の愛と勇氣」だろう。奪われた娘を思い、老いた父と母が日傘をさして寄居浜にたたずむシーンが何度か挿入される。見る者は、事件から30年

という年月の重さを思い知らされる。横田さん一家を私が初めて取材したのは1983年5月31日夜のことだ。事件から5年半がたっていた。「消息が分かるまで」と新潟勤務の続行を希望していた滋さんに東京へ



©Safari media LLC 2004

の転勤辞令が出たのだ。当時はむろん、北朝鮮の拉致だとは思ってもいなかった。「大勢の人たちの温かい励ましと力添えのおかげで、私たちは泣きながらも今日までやってこられた。そうでなかったら新潟は嫌な思い出ばかりの土地になっていたかもしれない」。引越準備が進む自宅で、夫妻はめぐみさんへの思い、新潟を去るにあたっての心境を切々と話して

くれた。その場面が、映画のシーンと二重写しとなった。怒り、悲しみ、やるせなさが心にずしりと残る映画だった。10月5日に都内のホテルで開かれためぐみさんの42歳の誕生日会で、

早紀江さんは映画について「どんな大きなケーキよりいい誕生日」と語った。多くの人に見てもらいたいと願わずにはいられない。

新潟日報東京支社報道部長

伊藤 直人

めぐみ

引き裂かれた家族の30年

年月の重み

愛と勇氣と

安倍政権の日本

星 浩

(朝日新聞編集委員)

戦後では最も若い52歳の首相が誕生した。自民党総裁選は、福田康夫氏の出馬断念で「消化試合」となり、盛り上がりは欠いた。それでも、安倍政権の誕生は、日本政治の一つの転換点となるだろう。憲法改正、アジア外交、構造改革はどうなるのか、そして小沢民主党との対決は……。政権発足の経過をたどるとともに、さまざまな政策課題の行方を占った。学者との対談も収録。朝日新聞が創刊した12冊の新書の一冊。

(朝日新書 735円)

針路を海にとれ 海洋国家日本のかたち

大山 高明

(日本海事新聞社代表取締役社長)

「この国を駄目にしていくのは大手メディアではないか」という一部の人がいる。時代のすう勢、時の指導者、見えざる手等々に責を帰する意見もある。「所詮国家はその国民のレベルにしかねない」のが実態ではなかろうか。このままでは民族の自覚と誇りを失った日本になりかねない。縄文の祖先が持っていた日本海洋民のDNAと勇氣を取り戻す時が来た。専門新聞の親父の静かな咆哮にも耳を傾けてもらいたい。

(産経新聞出版 1470円)

「クラブ賞」候補者の推薦を
明年1月31日が締め切り

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を「日本記者クラブ賞」候補としてご推薦ください。締め切りは1月31日(水)です。

「選考基準」は左記の通りです。

- ① 現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である(現役という意味は現に活動しているということ故人は対象としない)
- ② スクーブ賞ではない

く、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される。③その存在および業績が、ジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。

会員および会員社に属する方々が候補有資格者です。推薦者は所定の用紙に記入し、推薦理由(2000字以内)に参考資料を添えて提出願います。推薦委員会、選考委員会では添付された資料をもとに審査しますので。詳細は事務局へお問い合わせください。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■シンポジウム「アメリカ・イスラム・中国—新政権の日本外交を語る」 主催：日本ウズベキスタン協会

日米同盟を基軸としながらも、日本はアジアやイスラム社会とどうつきあっていくのか—日本外交のあるべき姿について五百旗頭真防衛大校長、伊藤芳明毎日編集局長、国分良成慶大教授、酒井啓子東京外語大学院教授、田中均前外務審議官、ジャーナリスト篤信彦氏らが討論した。(10. 6 10階ホール)

照会先：日本ウズベキスタン協会 Tel：03-3593-1400
<http://homepage2.nifty.com/silkroad-uzbek/>

■第13回はがきエッセーコンテスト表彰式

新聞配達的重要性について理解を深めてもらうためスタートしたコンテスト。13回目の今年は4,654編の応募があり、「大学生・社会人」「中学生・高校生」「小学生」の各部門で最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞、入選が選ばれた。最優秀作・中村人生さん(43歳)の「僕は若いころ、『新聞屋さん』」など入選作は<http://www.readme-press.com/essay/13time/index.html>で読むことができる。(10. 7 10階ホール)

照会先：日本新聞協会経営業務部 Tel：03-3591-4405

■日中問題で提言—平和と安全を考えるエコノミストの会

1年半かけてまとめた提言「日中経済・政治関係の強化と地域経済協調—東アジアの安定的な発展をめざして—」を理事長の河合正弘東大教授が発表した。(10. 10 宴会場)

照会先：同会日本支部東京事務局 Tel：03-5435-8355

■日本ジャーナリスト懇話会 10月例会

西村陽一朝日新聞政治部長が「安倍新政権 待ちかまえる難局」のテーマで講演した。(10. 19 大会議室)

■アジア・バロメーターから見る中国の市民意識と対外認識

「アジア・バロメーター」とはアジアの普通の人々の日常生活に焦点を当てた世論調査。ダイナミックに変容する中国の2006年調査を踏まえ、中国人の家族観、教育観、不平等観などについて猪口孝中大教授、園田茂人早大教授、田中明彦東大教授らが報告した。

「アジア・バロメーター」詳細は猪口教授のHP (<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~inoguchi/>)からアクセスできる。(10. 19 大会議室)

■日本医師会定例記者会見

医師会が行った「療養病床の再編に関する緊急調査」の結果について天本宏、鈴木満、中川俊男の各常任理事が会見した。報告資料はHP (<http://www.med.or.jp/>)に掲載されている。(10. 25 大会議室)

照会先：日本医師会 Tel：03-3946-2121

■東京新聞フォーラム「日中文化交流 新時代を築く」

東京新聞本社移転と日中文化交流協会創立50周年を記

新しいOB会員

念して開催。中国作家協会副主席の鉄凝氏が基調講演したあと、青木保早大教授、小栗康平映画監督、白燐中国社会科学院研究員、川村範行東京新聞論説委員(コーディネーター)らでパネル討論。内容は11月25日付紙面に掲載される。(10. 26 10階ホール)

照会先：東京新聞新世紀懇話会 Tel：03-6910-2086

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

吉富
カクテルスタンダードジャズ・シリーズ
11月は「イェスタデー」

先月から始まったカクテルとノン・アルコールの2種類を楽しんでいただくシリーズの第2弾です。今月は“燃える秋”からイメージをふくらませました。メーンはトマトジュースで、カクテルはお馴染みの「Bloody Mary」。ウオツカ抜きのノン・アルコールの味もお試しくささい。



和食

割烹「山麓」のきりたんぼ鍋を原価で

(11月20日～12月1日)

秋田の割烹「山麓」特製のきりたんぼ鍋を、ことしも原価の2,000円(1人前)で提供します。すでに12組67人の予約をいただいています。おふたりからお受けしますので、早めにお申し込みください。

ふぐ特別コース (5,880円) がおすすめ

(12月4日～07年2月2日)

毎年好評のふぐコースを明年2月初旬までお出しします。ヒレ酒も用意します。必ず予約をお願いします。

(板長: 薬科浩)

先付2点 ぶぐうす造り 鱈照焼 ぶぐ唐揚げ ぶぐ鍋
と旬の野菜 ぶぐ雑炊 アイスクリーム

洋食

540キロカロリーのヘルシーコース

(11月13日～12月22日)

フルコースなのに総カロリーはわずか540キロです。メーンはブイヤベース(スズキ、蝦夷あわび、車エビ、ホタテ貝入り)です。これに前菜、青リンゴとナッツのサラダ、杏仁豆腐とフルーツ、コーヒーがついて2,730円です。ランチタイムにもお出しします。

(シェフ: 黒須修一)

宴会
プラン

個室での忘年会・新年会プラン

(11月20日～07年2月16日)

お手軽なパーティー・プランを用意しています。お一人3,300円(洋食8品+寿司、そば、デザートつき)で、飲物・部屋代は別ですが、1,200円をプラスして飲み放題(2時間)にすることもできます。なお、お酒の持ち込み料は無料です。10人からお受けします。

予約・問い合わせは3503-2724の貸室担当へ。

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン (10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能

委員=池谷 忍 石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也
高橋利行 西田善夫 松本侑壬子

連絡=長谷川和子 本庄五月

(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

クラブ会見の報道の仕方をお願い

長野放送の社長を引いて、最近、個人会員になった佐久間芳夫さんから、事務局へ「注意」のメールをいただいた。クラブで行ったI O Cのロゴ会長会見(10.19)を夕方、NHKのテレビで見たが、「日本記者クラブ」でなく「都内で会見」となっていたというご指摘。

六本木かどこかのクラブでやっているのではなく、報道各社が協力して設立したナショナル・プレスクラブが主催なのだから「日本記者クラブで会見」と報じるべきではないですか、とのご注意だった。

ごもっともなので、早速、NHKへ連絡を取り、再確認してもらった。その結果、公明党の太田新代表(10.25)の昼食会からは「日本記者クラブ」とテロップを入れるようにしてくれた。

民放の場合も「日本記者クラブ」とメンションされないことが目立つが、新聞、放送を問わず会員社は、報道機関として主体的に結成したクラブだということを意識して、必ず「日本記者クラブで会見し」と報じていただきたい。(岩崎)

<法人会員代表変更>

テレビ埼玉 (新) 岩崎 勝義	代表取締役社長
(旧) 中根 憲一	
信越放送 (新) 田幸 淳男	代表取締役社長
(旧) 塩沢 鴻一	
NHKエンタープライズ	
(新) 三枝 武	代表取締役社長
(旧) 板谷 駿一	

<訃報>

山本肇会員(NHK出身、66歳)が10月29日、心不全のため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

<会員現況>法人会員 146社 基本会員 812人
個人会員 1,648人 法人・個人賛助会員 76社 186人
特別賛助会員 76人 名誉・功労会員 10人
計 222社 2732人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」: 10月の新規掲載

- シーファー米大使(英文)(06.10.27)
- ゴフ・ニュージーランド国防・貿易相(06.10.24)
- 中川秀直自民党幹事長「日本保守政治の画期としての安倍政権の誕生」(06.10.11)
- 渡辺靖慶大教授「『恐怖の文化』とコミュニティ」(06.10.6)
- 但木敬一検事総長「日本的民主主義と裁判員制度」(06.8.25)
- 大沼保昭東大大学院教授「『護憲の改憲論』の根拠」(06.3.10)
- 木原正博京都大学教授「第2のエイズの時代—若者たちが危ない」(02.5.30)

今後の行事予定 (11/2現在)

- 11.15(水) 15:30~17:00 (10階ホール)
嘉田由紀子 滋賀県知事記者会見
- 11.20(月) 12:00~13:45 (10階ホール)
西室泰三 東京証券取引所社長昼食会
- 11.22(水) 15:00~16:30 (10階ホール)
チャールズ・D・レイクII 在日米商工会議所会頭記者会見

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

写真回廊

撮影 渡会 浩 (信濃毎日新聞松本本社)
報道部写真課



北アルプス潤沢カールのナナカマド カメラなど20キロの荷物をかつぎ上高地から6時間の登山を経て撮影(10.6)

文系、理系…?

「紅葉とアブラムシ」という話がある。なぜ、秋になると木々の葉は赤や黄色に色づくのか、という疑問に答えるものだ。

いわく、木々のこの営みには目的がある。それは、冬に備えて害虫のアブラムシを寄せ付けないためだ。アブラムシは特に色の好み激しく、赤や黄色など明るい葉の木を避けるくせがある。だから、それを利用して警告しているのだ――。

ネット上の科学ニュースコラム「気になる科学ニュース調査」によると、まじめな学説だが、説得力にいまひとつ欠けていてまだ定説までにはなっていないそうだ。

かたや、広辞苑をひもとけば、「もみじ」は「紅葉」「黄葉」とも書き、上代にはモミチと清音で「黄葉」、平安以降「紅葉」と多く書く、とある。

上代で「黄葉」と多く書かれたということは、その時代に「こうよう」した木々の葉は、黄色が多かったのだろうか、それとも上代の人々の「きれい」感覚は、赤よりも黄色に対して強かったのだろうか？

季節の訪れを伝える一枚の写真だが、そこからいろいろな想いが頭をもたげってくる。あなたは理系、文系どちらのタイプ？ いや、どちらでもない。「やほな理屈はいい。ほおーっ、北アも紅葉真っ盛りかと、素直に味わいたい」という感動派？

(橋場義之)